Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-29

特集解題　「死の社会学」の再起動に向けて（小特集 III　「死の社会学」の再起動に向けて）

梅村，麦生
藤井，亮佑

(Citation)
綜合文化,2:275-280

(Issue Date)
2026-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100504221

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504221

KOBE UNIVERSITY

■小特集Ⅲ　「死の社会学」の再起動に向けて

〔解題〕

特集解題　「死の社会学」の再起動に向けて

梅　村　麦　生
（UMEMURA Mugio）
藤　井　亮　佑
（FUJII Ryosuke）

人は女から生まれ、人生は短く、苦しみは絶えない。　（『ヨブ記』14 章）

未だ生を知らず、焉くんぞ死を知らん。　（『論語』先進）

1　はじめに
――多死社会における「死の社会学」

人は誰しもいつか死ぬ。人はそのことを知っている。ただし、誰が（そして、自分が）、いつ、どのように死ぬかまでは、わからない。死が此岸での生の終りを意味するものとしたならば、この生で自らの死を経験することもない。

そうした人の死をめぐる思想は、宗教や哲学、芸術の始まりと同じくらい（もしくは、それ以上に）古い。人間にとって死とは普遍的な現象であり、思想の普遍的な主題でもある。

その一方で、死をどのように扱うのかは、時代や文化、社会によって多かれ少なかれ異なるものであった。イギリスの社会学者・死生学研究者のトニー・ウォルターが言うように、「死はすべての人間に訪れるが、死をどのように扱うか、象徴するか、経験するかは多様である。個人で異なるというだけでなく、集団によっても異なる」（Walter 2020 = 2024: 1）。したがって現代の社会学においても、とりわけいまこの社会で死がどのように扱われているのかをめぐって、研究が重ねられている。

特に現代の日本は「多死社会」とも呼ばれるとおり、いわば平和裡に「大量死」の時代を迎えている。むろん他国や他地域を見れば、いまなお戦争によって強いられる多くの死がある。さらに新型コロナウイルス感染症の流行では地域を問わず数多の人が亡くなり、世界規模での人口減も生じた。しかし日本や他の先進諸国が直面している大量死とは、高度経済成長期までの「人口ボーナス期」とその後の長寿化がもたらした超高齢化社会という、むしろ言祝ぐべき事態の副産物でもある。さらに現代では社会のさまざまな領域で個人化が進み、旧来の共同体の解体や世帯の小規模化が進むなかで、死もまたそれぞれの局面で個人が対峙するものとなっている。「〈ひとり死〉の時代」（小谷 2025）とも呼ばれるゆえんである。

そうした死をめぐる現実を前に、社会学はどのように死にアプローチできるのか。

もとより冒頭に引いた論語の一節にも見られるとおり、あるいは近代社会における死と不安について論じた社会学者ジグムント・バウマンが、アウグスティヌスによる時間についての哲学的考察の導入を

もじって、「われわれはみな、〈死とは何か〉をよく「知っている」。ただしそれは、われわれがいったい何を知っているのかついて、精確に説明するよう求められるまでは、のことである」（Baumann 1992: 2）と記すように、死には特有の観念性、もしくは特有の知と非知の共存が見出される。

そのなかで死をめぐる社会学的研究、つまり「死の社会学」は、何より死をめぐる「社会的行為」（副田編 2001: vi）、あるいは「死、悲嘆、死別」さらには「死者の扱い」までをも含めた、「異なる文化のもとでおこなわれる、死を管理する実践」（Thompson and Cox 編 2017: 1）を対象としている。総じて言えば、死をめぐるコミュニケーション全体がその対象となる。

2 「死の社会学」のアプローチ ——死という現実／観念を構成する諸契機

したがって死の社会学は、そこで扱う〈死のコミュニケーション〉の関与者、対象と内容、さらにはそれをとりまく環境に応じて、さまざまな研究がありうる。

そのため「死の社会学」の概観や分類にも、さまざまな観点がある（詳細は、副田 2001 編；澤井 2005；株本 2012；Thompson and Cox 編 2017；Walter 2020 ＝ 2024；藤井 2025 などの各研究を参照されたい）。ここでは特に、〈死のコミュニケーション〉の対象と内容を構成する異なる契機に即して、順に見ておくこととしたい。

2-1. 死の外部境界——死と死ならざるもの

まず死の社会学では、死が個人や社会にとってどのような意味をもつのかという、死をめぐる意味の問題に焦点があてられる。そして「死」はあくまでつねに、そのつど「死ならざるもの」と対比されるなかで、特有の意味をもつ。

①生／死の区別

つまりゲオルク・ジンメルの『生の直観』（Simmel 1918 ＝ 1994）を嚆矢として、「死の哲学」の論考ですでに論じられてきたように、死はとりわけ「生／死」の区別に基づき、つまり生との関係に位置づけられることによって、意味をもつ。その限りで、生と死とは相互に意味を規定している（梅村 2023）。日本語で「死」についての考え方や学問が「死生観」や「死生学」と表現されるのも、まさにそうした相互規定の含意が前提とされている（島薗・竹内編 2008；島薗 2012）。

このことは哲学や思想の問題であるのみならず、日常を生きる私たちの問題でもある。したがって社会学では、現代社会における「生きがい」が「死にがい」と、そして「生の意味喪失」が「死の意味喪失」と結びつけて、論じられてきた（井上 1970；澤井 2008；藤井 2025）。

さらに生／死の区別が「死」の意味の前提にあるということは、生者／死者の区別が問題になるということでもある（磯部 2023）。したがって後段で言及する葬送儀礼に見られるとおり、その社会で死者が生者によってどのように扱われているのかは、その社会における死の位置づけと不可分である。

②死／不死の区別

加えて、「死」の意味を規定する、「死」と「死ならざるもの」の違いをもたらすものとしては、他に「死すべきもの／不死なるもの」（mortality/immortality）の区別がある（Bauman 1992）。これはヨーロッパの中世哲学や神学で論じられた「時／永遠」（tempus/aeternitas）の区別と重なるものであるが、「不死なるもの」への関心は宗教や信仰の問題にとどまらない。バウマンが論じるとおり、近代社会もまた人々が抱く「不死なるもの」への憧憬をある種の動力としつつ、さらには「死すべきもの」としての人間の現実に支えられている。

2-2. 死の内部境界――死の諸相

そして生／死や、死／不死のみならず、死のなかにもさまざまな領域を区別することができる。

①死の現象／死の表象の区別

第一に、すでに述べたように死という現実と死についての観念、言い換えると「死の現象／死の表象」の区別がある。したがって社会学では歴史学と結びつき、「死の表象」が歴史的にどのように描かれてきたのか、そしてこの社会でどのように提示されているのかが、扱われてきた（Ariès 1975 = 2022）。そこからさらに、近代化にともなう多死社会から少死社会への変化、死の個人化や医療化を背景として、個人が死に関わる機会が少なくなる一方で、メディア上では死に関する報道やコンテンツ、つまり「情報としての死」が氾濫し、〈現実の死の隠蔽〉と〈死の観念の拡散〉が同時に生じるという、「死のポルノグラフィー」化が指摘されてきた（Gorer 1965 = 1986；澤井 2020）。

②異なる観点、人称、価値評価のもとでの死

さらに現象としての死に限ってみても、どの時点で、あるいはどの状態に至ると「死」であると見るのかに応じて、「生物学的死／医学的死／法的死／文化的死／社会的死」を区別することができる（小谷 2025: 82–119）。その境界線は、医療や司法の現場から、脳死や臓器移植をめぐる政治的な議論、さらには通夜、葬儀、法事といった一連の葬送儀礼のなかで、必ずしも固定的でないものとして立ち現れている。

またフランスの哲学者ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ（Jankélévitch 1966 = 1997）が明確に論じたように、死の経験には「一人称の死／二人称の死／三人称の死」に応じて、交わりがたい違いがある。つまり原理的に経験できない自らの死と、身近な人の死やそれ以外の誰かの死、あるいは一般的に論じられる死との違いである（中筋 2025）。死をめぐる経験とは、つねに非対称なものでもある。

加えて、誰しもいつか死ぬことには変わりがないとしても、どのように死を迎えるかには、少なからぬ違いがある。つまりその死が自然死であるか事故死であるか、あるいは自死であるか、果ては他殺であるかは、社会のなかでもその死に対峙する者にとっても、まったく異なる意味をもっている。災害や戦争で強いられる死、あるいは「民族」やさまざまな「集団」ないし「属性」の名の下での虐殺もまた、日常で迎える死とは同列に扱うことができない（渡壁 2023；韓 2024）。

さらに自然死のなかでも、現代の医療技術の発展のもとで、突如訪れる死と「延命治療」の果てに迎える死とで、あたかも「良い死／悪い死」の区別が存在するかのごとく論じられ、自然死か自死か、あるいは自死か他殺かの別を超えて、「安楽死」というカテゴリーまでもが設けられている（立岩 2022）。

③死の過程――人は誰かから生まれ、年をとり、やがて死にゆく

ここまでの議論でもすでに現れてきたように、「死」とは単なる瞬間的な出来事でも、実態のない観念でも、単一の事態でもない。そこには必ず、死ならざるものから死のときを経てその後に至る、一連のプロセスがある。

つまり哲学と社会学の双方の視点からエドガール・モランが論じているように、生きること、年をとること、そして死にゆくこととは、生物学的に見れば同一の過程に対して、人間が恣意的に設けている区別に過ぎない（Morin 1970 = 1973）。しかしそれでも、自らや他者がいよいよ「死にゆく過程」にあると認識されるか否かは、文字通り死活的な問題である。生者を中心に営まれる「死して屍」のこの社会――あるいは、人の死に清めの塩をまいてきたこの社会――は、病いや老いを経て「死にゆく者」が他の人びとから遠ざけられ、孤独を強いられる社会でもある（Elias 1982 = 1990）。なおかつ身近な人の

死に際しても、死と死別、死の悲嘆や葬送と祭祀の異なる段階がある（Gorer 1965＝1986；澤井 2005；中筋 2006；Thomson and Cox 編 2017；辻井 2023）。「悲しみか無（グリーフ・オア・ナッシング）なら、おれは悲しみを選ぶ」（ウィリアム・フォークナー『野生の棕櫚』）。とりわけ葬送儀礼に象徴される、生者が死者に臨む実践は、人類学や社会学の重要なテーマであり続けている。

以上に見てきたとおり、ありていに言えば死は社会のなかできわめて複合的な問題として現れている。ウォルターが「死のジグソーパズル」と評したように、死をめぐる現実と観念との多面性に応じて、多角的な研究が求められている。

3 「死」をめぐる問題系のリバイバル

以上より示唆されるとおり、この多死社会のなかで「死の社会学」は活況を見せている。さらに言えば私たちは、あたかも死を隠蔽し不死を目指してきたとされる近代化の果てに、むしろ「死のリバイバル」（Walter 1994）とも呼ぶべき状況に至っている。

今日の「死の社会学」は、そうした「死のリバイバル」を前にして、あえて言えば「死の再魔術化」の過程を捉えようとしている。

つまり、ドイツの社会学者ハルトムート・ローザが言うように、近代化とは人びとがありとあらゆるものを「意のままに」なるように試みてきた過程であるとしたならば、後期近代社会においては、「意のままにならない」「モンスター」として、死が還帰している（Rosa 2020）。死も死者も、本来的には生者の「意のままにならない」にもかかわらず、近代はそれを「意のままに」なるように努めてきた。その果たされざる望みが、死と死者をかえって「モンスター」として立ち現れさせてきた。

したがって死にとりくむ社会学は、死を単に一人称では経験不可能な観念としてではなく、ある種の「超越経験」としての再考を試みている（市野川 1991；張江 2000；Rosa 2020）。そもそも私たちにとって、「死」だけが経験不可能なのではなく、自然も事物も他者も、ひいては社会も世界も、あくまで「自分自身の体験を超越した現実」として経験している。その限りで、死もまた一つの超越経験として経験される。現代社会における超越経験一般が再考されるなかで、死との関わりも問い直されている。

そのなかでも、人文諸学での「存在論的転回」と「物質論的転回」と呼ばれる動向の影響を受けて、これまであくまで生者の視点を中心に論じられることがほとんどであった「死の社会学」においても、あらためて「死者というアクター」、さらには死者と生者を媒介する「モノのアクター性」に注目した研究がおこなわれている（磯部 2023；辻井 2023；藤井 2025）。

4　おわりに――本特集について

本特集は、「死の社会学」に関心のある若手研究者が集って立ち上げた、関西社会学会第76回大会若手企画「死に対処する現代社会の知と実践――『死の社会学』の再起動に向けて」による成果の一部である。同企画は企画代表者の藤井亮佑（関西学院大学）の考案によるものであり、他のメンバーは磯部美紀（親鸞仏教センター）、辻井敦大（甲南大学）、韓光勲（梅花女子大学）、渡壁晃（京都大学）、梅村麦生（神戸大学）、である。

2025年5月31日に開催された関西社会学会大会の当日は、藤井亮佑「近代社会の死別のアノミー：デジタル社会における死と不死」、辻井敦大「なぜ墓地は「死」を表象しなくなったのか？：生物のエージェンシーに注目して」、磯部美紀「死者と生者の関係性――「死の社会学」再考の糸口として」、渡壁晃「原爆記念日の社説からみた被爆地長崎の平和意識の変容」の四報告をおこない、司会者を韓、討論者を梅村が務めた。なお本稿は、大会時の梅村によ

る討論者コメントを大幅に加筆して執筆した。

また韓と梅村は、事前に開催された公開研究会で、韓光勲「虐殺された死者の追悼と記憶：日朝協会の運動を事例として」（2025年1月26日）、梅村麦生「生存学と死生学のあいだ――立岩真也の死生学観再考」（2024年9月28日、甲南大学）の報告をおこなっている。

そして本誌では、磯部美紀による論考「僧侶の語りにみる死者に触発される生者：沖縄の浄土真宗の事例から」を掲載する。上記の若手企画の詳細については、『フォーラム現代社会学』24号（関西社会学会、2026年5月刊行予定）に掲載予定の藤井による企画紹介を、また『メディア・コミュニケーション』76号（慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所、2026年3月刊行予定）に掲載予定の梅村、藤井、渡壁の各論考も、併せて参照されたい。これらの企画をとおして、あらためて現代の「死の社会学」について考えるきっかけとなることを、メンバー一同望んでいる。

文献

Ariès, Philippe, 1975, *Essais sur l'histoire de la mort en Occident du Moyen-Age à nos jours*, Paris: Seuil.（伊藤晃・成瀬駒男訳，2022，『死と歴史――西欧中世から現代へ』みすず書房.）

Bauman, Zygmunt, 1992, *Mortality, Immortality and Other Life Strategies*, Stanford, California: Stanford University Press.

Elias, Norbert, 1982, *Über die Einsamkeit der Sterbenden in unseren Tagen*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（中井実訳，1990，『死にゆく者の孤独』法政大学出版局.）

藤井亮佑，2025，『死が消滅する社会――遺品整理業をめぐる死とモノの社会学』関西学院大学出版会.

Gorer, Geoffrey, 1965, *Death, Grief, and Mourning in Contemporary Britain*, London: Cresset Press,（宇都宮輝夫訳，1986，『死と悲しみの社会学』ヨルダン社.）

韓光勲，2024，「関東大震災朝鮮人虐殺をめぐる記憶運動――「関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し慰霊する会」を事例として」『韓国朝鮮の文化と社会』23：209–243.

張江洋直，2000，「死生論と〈世界の超越〉――「死の社会学」基礎論のために」『情況』第二期 11(7)：201–217.

市野川容孝，1991，「死の社会学・序説――「他界」に関する試論」『ソシオロゴス』15：152–168，（2026年1月31日最終閲覧，https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~slogos/archive/15/ichinokawa1991.pdf）

井上俊，1970，「「死にがい」の喪失――戦無派世代の死生観」（特集 戦無派世代の反戦思想）『思想の科学』105：4–14.

磯部美紀，2023，「弔いにおける死者と生者――「客体に留まらない死者」を視点に」『哲学論集』69：29–43，（2026年1月30日最終閲覧，https://otani.repo.nii.ac.jp/records/2000423）

Jankélévitch, Vladimir, 1966, *La mort*, Paris: Flammarion.（仲沢紀雄訳，1997，『死』復刊版，みすず書房.）

株本千鶴，2012，「テーマ別研究動向（死の社会学）」『社会学評論』63(2)：302–11.

小谷みどり，2025，『〈ひとり死〉時代の死生観――「一人称の死」とどう向き合うか』朝日新聞出版.

Morin, E.,[1951] 1970, *L'homme et la mort, nouvelle édition revue et complétée*, Paris: Seuil.（古田幸男訳，1973，『人間と死』法政大学出版局.）

中筋由紀子，2006，『死の文化の比較社会学――「わたしの死」の成立』梓出版社.

中筋由紀子，2025，「エゴイズムと死について」『愛知教育大学研究報告　人文・社会科学編』74：73–79，（2025年5月30日最終閲覧，https://aue.repo.nii.ac.jp/records/2000568）

Rosa, Hartmut,[2018] 2020, *Unverfügbarkeit*, Berlin: Suhrkamp.

澤井敦，2005，『死と死別の社会学――社会理論からの接近』青弓社.

澤井敦，2020，「「情報としての死」の変容――死の社会学の観点より」『法學研究』93(12)：1–25，（2026年1月31日最終閲覧，https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20201228-0001）

島薗進，2012，『日本人の死生観を読む――明治武士道から「おくりびと」へ』朝日新聞出版.

島薗進・竹内整一編，2008，『死生学1　死生学とは何か』東京大学出版会.

Simmel, Georg, 1918, *Lebensanschauung: Vier metaphysische Kapitel*, München und Leipzig: Duncker & Humblot.（茅野良男訳，1994，『生の哲学』新装復刊，白水社.）

副田義也編，2001，『死の社会学』岩波書店.

立岩真也，[2008/2009]2022，『良い死／唯の生』筑摩書房.

Thompson, Neil and Gerry R. Cox(eds.), 2017, *Handbook of the Sociology of Death, Grief, and Bereavement*, New York and London: Routledge.

辻井敦大，2023，『墓の建立と継承――「家」の解体と祭祀の永続性をめぐる社会学』晃洋書房.

梅村麦生，2023，「見田宗介（真木悠介）『時間の比較社会学』

と死の意味論」『現代社会学理論研究』17: 68–80,（2025年5月30日最終閲覧，https://doi.org/10.34327/sstj.17.0_68）
Walter, Tony, 1994, *The Revival of Death*, London and New York: Routledge.
Walter, Tony, 2020, *Death in the Modern World*, London: Sage.（堀江宗正訳, 2024,『近代世界における死』法政大学出版局.）
渡壁晃，2023,「広島・長崎平和宣言からみた平和意識の変容」『社会学評論』72(2): 118–134,（2026年2月28日最終閲覧，https://doi.org/10.4057/jsr.72.118.）

（神戸大学・社会学／関西学院大学・社会学）